

大学院教育学研究科教育実践高度化専攻
共通基礎科目：授業研究の開発実践

令和2年度「授業評価・授業研究報告書」

大学院教育学研究科 兵藤 清一

1. 授業の基本情報

本報告における対象授業は、大学院教育学研究科教育実践高度化専攻における共通基礎科目：「授業研究の開発実践」である。登録学生数は24名、担当教員は兵藤清一、藤堂浩伸、高橋葉子であった。本報告は授業の担当である兵藤が、その立場から授業を概括したものである。本科目の目標は以下のとおりである。

「授業研究」の目的及び意義・意味を理解するとともに、「授業研究」の理念や理論を基盤に、「授業研究」が効果的に機能する方策や「授業研究」の在り方について考察すること等を通して、校内研究としての「授業研究」を開発実践できる資質・能力を身に付ける。

授業計画は以下の通りである。

第1回：「授業研究」とは何か
第2回：「授業研究」の研究対象と問題（課題）の明確化
第3回：「授業研究」の理念・理論に関する研究動向①
第4回：「授業研究」の理念・理論に関する研究動向②
第5回：「授業研究」における理論と実践の往還①
第6回：「授業研究」における理論と実践の往還②
第7回：「授業研究」の理念・理論の考察・検討
第8回：「授業研究」に関する愛媛県内小学校の事例研究
第9回：「授業研究」に関する愛媛県内中学校の事例研究
第10回：実習校における「授業研究」の実践事例の交流
第11回：実習校における「授業研究」の考察①
第12回：実習校における「授業研究」の考察②
第13回：「授業研究」とカリキュラム・マネジメントとの関係性の理解
第14回：実習校における「授業研究」の改善策の検討
第15回：本科目の総括（これまでの学びを踏まえた「授業研究」の在り方の考察・検討）・振り返り

2. 授業開発と実践の概要

本研究における授業開発の方法として、授

業カリキュラム構成の側面と振り返り支援方法の側面に分けて、その方法を示していく。

まず、授業カリキュラム構成の第1段階（「問題」を発見・設定する段階）では、「授業研究」とは何かという本質的な問いから授業をスタートさせた。院生は、この問いを課題レポートにまとめ、これまでの既有知識、経験知や実践知等に基づいて「授業研究」に対する自己の認識を表出した。この既有知識、経験知や実践知等に基づく自己の認識の表出を、授業カリキュラム構成の最初に行うことで、「授業研究」に対する自己の立ち位置、認識の不足等の理解度の低さや曖昧さ、他者との認識の相違（多様性）等に気づき、自己の既有知識、経験知や実践知等の限界から、問題意識の醸成と「問題」発見・設定につなげていき、学術的な理論研究へと目を向け、「理論と実践の架橋」を促した。

次に、第2段階（醸成された共通の「問題」を追究する段階）では、「授業研究」に関する理論研究の論文読解を通して、「授業研究」の理論に関する認識を深めていった。論文は、「授業研究」の特長（歴史等を含む）と「授業研究」による教師の学習、「授業研究」の方法（質的研究、事例研究）の三つの側面に関するものであり、「知識構成型ジグソー法」の考え方をを用いて、エキスパート的な活動により個の問題追究を、ジグソー的な活動とクロストーク的な活動により協働的な問題追究を行った。それらの活動の中で、理論研究における実践の位置付け（理論と実践のつながり）を考えることを促し、「理論と実践を架橋」していった。さらに、愛媛県内の事例を取り上

げ、実践事例研究を通して、その実践の背景にある理論について考察し、「理論と実践の往還」を促していった。

第3段階（「問題」の追究結果を基に検討する段階）では、第2段階における「理論と実践の架橋・往還」から、自己の「授業研究」に対する認識を検討し、「授業研究」の新たな認識を基にした理論を再構築していった。再構築した理論を実践化していくために、実習校における「授業研究」システムを分析し、成果と課題を明確化した上で、改善策を提案した。

最後に、第4段階（自己の認識を基に理論化・実践化を目指す段階）で、カリキュラム・マネジメントの視点も取り入れながら、実習校における「授業研究」システムの改善策の実効性を他者と交流・検討することで、さらに「理論と実践の往還」を促していった。

次に、本研究における授業開発の方法における振り返り支援方法の側面については、まず、「2段階による振り返り支援方法」の第1段階の「自己内対話型」振り返り支援として、「振り返りシート」を作成し、「知識・理解に関すること」、「思考・判断に関すること」、「関心・意欲に関すること」の三つの具体的な視点を示し、その視点から、自己の認知を振り返るよう促した。

3. 授業開発の成果と課題

院生の授業・学びに関する意識アンケートの記述内容からの量的・質的な分析アプローチからは、授業カリキュラム構成の4段階と、2段階による振り返り支援方法は、「理論と実践の架橋・往還」を促すことに一定の効果があつたと考えられる。このように、授業において二つの具体的な方法を用いて、「理論と実践の架橋・往還」を促すことにより、院生は、授業における学び（理解）の深まりを感じていることもわかった。特に、7割以上の院生が授業前と後の自己の認識の変容・再構成を

強く感じている。その理由記述からは、「今まで授業研究を教師個人の学びと考えていたが、この講義を通して学校全体の協働的な学びの場と認識できた」、「授業研究は一人単位で行うものだと考えていたが、同僚と関わりながら行うことで学校組織の成長につながるという認識になった」、「授業研究を、最初はある特定の授業のみの改善と考えていたが、日常的な授業研究をどのように行っていくか、それを研究授業にどうつなげるか等のシステムづくりまでを含むものと認識するようになった」等の記述が見られた。このような記述からも、本研究における授業開発が、自己の認識を吟味・検討しながら、自己の既有知識や経験知、実践知等（主観）の認識を再構成し、新たな自己の認識を構築していく営みとして機能していたと考えられる。

今後の課題としては、上述の検証方法で示した、院生の学びの具体である、授業での発言や行動、振り返りシートや課題レポートの記述内容等からの質的な分析アプローチから検証していくことである。本稿では紙面の都合上、割愛したが、今後の研究において示していくこととしたい^註。

註

本研究報告書の詳細については、「大学教育ジャーナル」(第19号2021)を参照ください。